広島大学附属三原学校園研究紀要　第５集　2015　pp. 39-46

保　育

繰り返しかかわるための環境構成と教師のかかわり

―カラーセロファンと土粘土を使って―

掛　　志　穂

1　はじめに

最近の子どもたちの姿を見ていると，初めて見る物や印象的な物へは強く反応するが，それらへのかかわりは長続きしないと感じる。また，自然と触れ合って遊ぶ機会が減っているためか，自然が身近にあっても気づかない，関心をもたない様子も見られる。小田（2011）は「子どもたちは外界に対するこまやかな「気づき」に欠け，五感の反応は大雑把で鈍く，強く激しい刺激には反応しても，弱く穏やかな刺激にはこたえないという研究者からの警告が出始め」[1] たと述べている。しかし，その場限りになりそうな初めて見るものや印象的な物でも，繰り返しかかわることで，対象への気づきや発見や疑問，さらにかかわってみようという意欲がうまれ，かかわる中で楽しさを感じると考える。その過程で，普段は気づきにくい自然の不思議さに気づいたり感動したり発見したりするであろう。小田（2011）は「単に，遊ばせておけば学びや学習が成立するのではありません。基本的には計画的な環境の構成によって学びや学習がそうした環境の中に埋め込まれ，位置づけられなければ幼児期の教育とはいえないのです。」[2] と述べている。幼稚園での生活の時間には限りがある。この限られた時間の中で，子どもの意識を気づきにくい自然に向けたり，気づきなどがうまれるように繰り返しかかわろうとする環境構成や教師のかかわりを考えたりすることは重要である。

2　研究の目的

「印象的なものに強く反応するがかかわりが長続きしない」とか，「身近な自然に関心をもたない」などの子どもの実態から，どのような環境構成にすればかかわりや遊びが長続きするのか，自然に関心を向けられるのかを考えた。かかわりや遊びが長続きするとは，繰り返しかかわる遊びの姿と捉えた。また，その遊びが自然を取り入れたものであれば，気づきにくい自然に関心をもつことができると考えた。そこで，遊びの環境にカラーセロファンと土粘土を取り入れて考えることにした。

カラーセロファンは毎年本園で子どもたちが楽しく遊んでいる素材の一つである。メガネにしたりお菓子の包みにしたりと様々な使い方をしている。そのカラーセロファンに繰り返しかかわる中で今回は光と影という自然を取り入れてみる。光と影を感じるためにカラーセロファンを利用するのである。光と影は，身近にありながらもあえて意識しなければ見過ごしてしまう自然の一つと捉えている。

土粘土は，素材が自然の土そのものであるが，砂場の砂や泥団子の土とはまた違う「土」の感触を感じることができると考えた。また，合成の粘土との感触の違いも感じることができる。管理の仕方により，繰り返しかかわることができる素材と捉えている。この「カラーセロファン」と「土粘土」を使い，子どもたちが自然を身近に感じ，繰り返しかかわることができる環境構成や教師のかかわりを明らかにすることを本研究の目的とする。

3 研究の方法

(1) 対象児

年中組４歳児 21 名（男児 12 名　女児９名）

(2) 観察期間・場面

平成 26 年 10 月～11 月

好きな遊びをしている場面

クラスでまとまった遊びをしている場面

(3) 方法

子どもたちが「カラーセロファン」「土粘土」との出会いからその遊びやかかわりをどのようにつなげていったかについてのエピソードを記述する。カンファレンスなどによりエピソードを分析し，身近な自然に気づき繰り返しかかわるための環境構成や教師のかかわりを明らかにしていく。

4　実践事例（４歳児）

実践例１「かげをはっけん！」　　(10 月)

＜背景＞

台風の次の日，園庭にいろいろな枝や葉が落ちていた。形のいいもみじの枝が落ちていたので，子どもたちに見せたいと思い，挨拶をする下駄箱の足元にちゃぶ台を置き飾る。

登園してきたＡ女に「おはよう」と握手をして挨拶をしながら言う。「これね，台風で落ちとったけ飾ったよ」Ａ女は無言のまま，ちらりとちゃぶ台の上の飾りを見る。少し興味をもった表情を浮かべる。飾りに興味がいくように，拾った松葉をくるりと丸めていると，Ｂ女が「それどうするん？」と聞く。教師が「飾ってこようかなあ」と言いながら栗を二つ一緒に飾る。Ａ女は身支度をしながらついてきて，どこに置くのか見ている。「ここに置こうかな」と言いながら飾ると置いた物の影がきれいにちゃぶ台にうつる。すすきの影が線香花火みたいにきれいに映っている。「うわあ，すごい・・・。これ，どの影？」と教師が言うとＡ女は指で影を触りながら「これじゃない？」ともみじやすすきを触る。Ａ女が興味をもったところで，「Ａちゃん，なんか飾る？早く支度をしておいで」と言う。Ａ女が身支度を終えた頃，あとからきたＣ女が「ねえねえ，ペットボトルおいてみたら？」と言って四角いペットボトルを持ってくる。「いいねえ，おいてみ」と言いながらＡ女も一緒にどんな影ができるか期待して待つ。しかし，Ｃ女自身の影が邪魔してペットボトルの影がうつらない。「Ｃちゃん，ちょっとこっちよけてみ。影になっとるけえ」と言う。Ｃ女が横に移動した瞬間，ペットボトルの影がさっと現れる。周りにいる子どもたちが一瞬動きが止まったように静かになり「うわぁ，きれい・・・」「すごーい！」と感動の言葉が飛び交う。ペットボトルの模様が薩摩切り子のガラスのようにうつる。「動かしてみようか」と言ってゆっくりペットボトルを回してみる。影がきれいな模様をうつしながら回る。「すごーい，きれい・・・」と見とれている。Ｃ女は「ねえねえ，これに色水いれたらどうなるかな？」とわくわくしながら言う。「いいねえ，どうなるんかねえ。やってみ」と教師も賛成する。

Ａ女は拾ったどんぐりを教師に見せる。顔を見合わせて「どんな影になるかな？」と言うと，Ａ女はにこにこしながらどんぐりを置く。Ａ女が「あ，くりになった」と小さく喜んだ声で言う。「ほんとだ，栗になった」と教師も繰り返す。

しばらくしてＤ男が登園する。「見て見て。これ」と言いながら影に注意を向けるように言う。Ｄ男は「あ，これ（どんぐり）ふとっちょになるねえ」とおもしろがってどんぐりを触る。影の向きによって形が変わることに気づいたようだ。身支度を終えたＤ男は「この葉っぱもおいてみたら？」ととても穏やかに言う。「どうなるかねえ」と言いながら一緒にやってみる。影の形がおもしろくなるたびに二人で目を合わせる。

【考察】

自然への関心・意欲を高めるための出会いの環境構成として次のようなことが考えられる。

登園してすぐ見えるところに話題にしたいものを置く。そのことにより，影に気づいた。

さらに身近な自然物への興味をもてるように，教師は園庭で拾った松葉をくるくるまいて楽しそうにかかわっている。その教師の姿に刺激され，影に興味をもつようになっている。

子どもの言ったことや考えたことに「いいねえ」と賛同し，一緒に楽しむ雰囲気をつくる。そのときに，教師の驚きや興奮を保ったまま子どもたちとかかわることで，子どもたちがさらに興味をもつと考えられる。

図１　かげ！はっけん！

実践例２「ぼくのペットボトル！」　（10 月）

＜背景＞

ペットボトルに赤，黄，青，緑のカラーセロファンやストローを入れてきれいな色水を作る子どもたち。きれいな色が影に映るようにペットボトルの下に白い紙を敷いた。影に映った色も楽しんでいる。やりたい子がだんだん増えてきた。ペットボトルがなくなり残念がるＥ男に，あとでみんなで色水を作ろうと約束をした。

まとまった活動の時間になり，自分だけの色水を作ることを伝える。「ペットボトルもね，いろんなのがあったよ。どんな影になるんかね」と言って用意していた様々な種類のものをきれいに並べる。子どもたちは周りを囲んでじいっと見ている。「自分の好きな形のものを選んで自分だけの色水を作ろうか！」とわくわくしながら教師が問いかける。子どもたちの目はどれにしようかともうペットボトルに釘付けである。一人ずつ選んだあとは思い思いにカラーセロファンを入れて水の量も考えながら入れている。晴天だったため，できた子からテラスに出て太陽にかざして光を楽しんでいる。初めから作りたがっていたＥ男も意気揚々と「みて！すごいきれい！」と得意気に自分のペットボトルを教師に見せる。Ｄ男はゆっくり転がしたり速く転がしたりして「見て！おもしろいんよ！」とカラーセロファンの動きを楽しんでいる。また，友だちの真似をして思いっきり振って「色が出たー！」と喜ぶ姿も見られる。「うわあ，すごい！どうやって色が出たん？」と聞くと「いっぱいカラーセロファン入れてね，こうやって振ったら，ほらね。色が出るんよ」と得意げに説明する。「あーあ，真っ黒じゃ」と言う子には「どうして？」と聞くと「全部（の色）入れたけ」と残念がる。「これは濃いい光が見れるね。きれい」と言うと，そうかという表情になる。

【考察】

興味を引き出すために，カラーセロファンがきれいに映るように白い紙を敷くなどして数日過ごしたのは，周りの子のやりたい意欲を高めるのにはよかったと考える。また，自分だけのものが作れるように様々な種類のペットボトルを用意したのも効果的だったと考える。できたものに思い思いのかかわり方をしているのが面白いと感じた。友だちの真似をしたり比べたりできたのも，一斉に活動をしたためと考える。また，水に溶かして色の合成に気づく面白さも感じていた。

図２　いろいろなものを入れてみる

図３　白い紙を敷いて色を目立たせる

図４　ガラスみたいな模様。きれいでしょー！

実践例３「かげがない！」　（10月）

＜背景＞

早く登園した子と一緒に，みんなが作ったカラーセロファン入りのペットボトルを一列に下駄箱の近くに並べることを数日続けた。登園の時，ちょうど朝日があたってきれいに色が並ぶのである。登園してくる子に挨拶をしながら「きれいだねえ」と言って影を意識できるようにしていた。

朝の身支度を済ませて遊びに行こうと下駄箱に行ったA女が，保育室にもどってきて教師の肩をつんつんとつつき外を指さす。「どうしたん？」と聞くと「ない」とA女は少々困った表情で言う。そこでA女の指さすほうに一緒に行くと「かげ，ない」とA女が言う。「あー！ほんまじゃ。かげがない！」と教師は少々大げさに繰り返す。朝，A女と一緒に並べた時はきれいに色つきの影が並んでいたのである。数日前は気づかなかったが，数日のうちに太陽の高さと出る時間がじわじわと変化し，以前より影の長さと影になる時間が変わったのである。下駄箱前の植え込みの影がペットボトルの影をすでに隠しているのである。「おかしいねえ。どこに置いたら色が見える？」と聞くとA女はあたりを見回しペットボトルをテラスに並べ始めた。「ここならいいの？」と聞くと「うん」と言うので，また一緒にペットボトルを並べた。全部並べるとA女は園庭に遊びに行った。しばらくして戻ってきたA女が嬉しそうな顔をして「せんせい，ない！」と元気に言う。行ってみるとペットボトルの影がまた何かの影に隠れて消えているのである。「おもしろいねえ」と言いながらA女と顔を見合わせる。A女とのやりとりを見てB女が「なにしょうるん」と興味をもつ。「かげがねえ隠れるんよ」と教師が言うと，おもしろがってB女やC女も影の移動を楽しむ。この朝のペットボトル移動は数日続く。

【考察】

ペットボトルを一緒に置くことにより，影は動く，つまり太陽は動くということや影がどの位置に行くのかということを感じることができたと考える。色つきの影のきれいさを感じる体験をしているからこそ，そこまでの興味をもつことができたとも考える。

図５　色つき影を楽しむ

実践例４「おひさまでてこーい！」　（11月）

＜背景＞

色の影に興味をもったC女は画用紙をくりぬい

てカラーセロファンを貼り，それを太陽に透かしても色の影ができることを見つけた。それを持って「この赤色（のセロハンの影）を踏んだらいいことにしようや」と言って外でおにごっこが始まった。そのうち，カラーセロファンの影では小さすぎることになり，自分たちの影を踏む「影ふみ」をすることになっていった。

鬼になっているＥ男が「木の影は10秒じゃけんね」とずっと影に入っていることはずるいというルールを伝える。一緒に遊んでいる子たちは「わかった」と言いながら逃げている。教師がタッチされ鬼が交代する。「まてー！」と言いながら追いかけているとＥ男やＣ女は高いすべりだいに登る。教師が「あれ？影はどこだどこだ？」と言いながら遠くに映っている子どもたちの影を踏もうとするとＥ男が「やばい！見つかった！」と言って急いで逃げる。Ｃ女も続いて逃げる。今度はＦ男が「こっちだよー！」と言って教師のそばを逃げていく。追いかけようとすると太陽がかげる。「あー，影が見えなくなるー！」と教師が悲しそうに言うと，大笑いをする子どもたち。また太陽が出てはっきり影が見えると「まてー！」と言って追いかける。Ｆ男は教師に踏まれないように影の向きを考えて逃げるのでなかなか踏むことができない。

【考察】

色つきの影から自分やものの影に興味をもち始めたことは，身近な自然に気づきが広がり，遊びが発展していっていると捉えることができる。

また，影ふみを通して，大きい影に小さい影は隠れることができることを再認識したり，高い所に登ったときの影の空間的な位置関係を感じたり，太陽の光の強さにより影の濃さが変わったりすることも感じることができている。

実践例５「土のねんど？」　（11月）

＜背景＞

年長組が，園庭の隅で土粘土で遊んでいるのを見た数人の子どもたちは，早速興味津々でその様子を見つめていた。そのうち，年長に混じり土粘土でものづくりをさせてもらい，保育室にその作品を持ち帰ってきた。それを見た他の子どもたちも「なにそれ？」と興味津々であった。次の日，年長組に交じり土粘土でものづくりをさせてもらう子どもの数が前日より少し増えていた。土粘土に興味をもつ子が増えてきたので保育室で土粘土の活動をすることにした。

「年長組さんがしてた粘土は，実は土からできてるんだって」と伝えると「えー！」と驚く子どもたち。「みんなが使ったことのあるのは道具箱にある油粘土でしょ。あれも楽しいけどあとで手がにおうでしょ。ぬるぬるするし。使いたいときすぐ使えるのはいいんだけどね。土粘土は，山の土から見つけてくるだって。幼稚園の園庭にもあるかもしれんね。土だから匂わないし気もちがいいんよ。でも土だから放っとくと固まっちゃうんだって。ちょっと硬いけど触ってみる？」と少しじらしながら言う。「さわってみる！」と元気に答える子どもたち。

固まらないようにぬれ布巾で包みビニール袋に入れてある土粘土の塊を子どもたちの前にどんと置く。袋から出てくる土粘土をじいっと見つめている。「この魔法の糸（釣り糸）で切るからね」と言って，端からすうっとひとかけら切る。そのなめらかな切れ味に子どもたちは「うわあ」とため息のような感動の声をもらす。それを人数分切り分けて渡す。「気もちいい」「けっこう，かたいねえ」「土のにおいがする」など言いながら，丸めたりこねたりし始める。まずは感触を楽しんでいる。そのうち形を作り始める。丸をたくさん作る子，雪だるまを作る子，へびのように長くのばしてぐるぐる巻いていく子，ピザのようにとにかくうすくのばす子，年長組のようにお皿を作り

食べ物をのせる子，動物を作る子，アメやパンを作る子など思い思いに土粘土を楽しんでいる。しばらく遊んだあと片づけについて話す。

「また明日もしたい？何回も使うために今日はまた丸めて，ぬれた布巾に包んでビニール袋に入れて，タッパに片づけようね。そしたら明日も使えるからね」と土粘土の特性に触れられるように扱い方を伝える。子どもたちはまた明日もできると分かり，丸めて片づけ始める。

【考察】

年長組からの刺激を受けてそれをクラスで広めることにより，やりたい意欲を高めることができたと考える。また，粘土が身近な土からできているという驚きや釣り糸で切ったときの滑らかさへの感動も，土粘土との出会いを感動的なものにすることにつながっていると考える。目の前で土粘土の扱い方を見せることにより，土粘土の重さ硬さ滑らかさ乾燥しやすいなどの特性を感じることもできたであろう。

図６　つちねんど，かたいねえ・・・

実践例６「パン屋さんする？」　（11月）

＜背景＞

土粘土にかかわった次の日から，自分たちでも土粘土の出し入れができるように扱いやすい大きさに丸めてタッパに入れた。また，年長組の影響から，土粘土をケーキにみたて秋の実を飾ったり，できたものをカップに入れお盆に並べることを想定して秋の実やカップ，お盆を用意した。合わせて，自分たちが持ってきたどんぐりやふうせんかずらの種なども土粘土の近くに用意した。

①とにかく作ってみる

登園するなり「土粘土しよう」と張り切るＦ女とＧ女。早速思い思いのものを作り始める。丸いクッキーのようにして千日紅の花を飾りカップに入れたものや細長い棒を作りくるくる渦巻き状にしてぺろぺろキャンディーを作っている。そこにＡ女，Ｂ女，Ｃ女，Ｇ女がやってきて一緒に作り始める。年長組のようなケーキを作っている。用意していた土粘土があっという間になくなってしまう。

次の日，土粘土は前日より少し多めに用意した。飾るものは子どもたちが持ってきた小さいどんぐりやたね，ピラカンサの実や年長からもらった千日紅の花などを主に用意した。入れ物はアルミカップを用意していたが，土粘土を目立たせるために園庭の木の葉を数枚用意した。

②あるものを工夫して作る

素材が増えていることに気づいたＢ女が「なんで葉っぱがあるん？」と聞いてくる。そこで「アルミカップもいいけど，葉っぱのお皿もおしゃれかなと思って」と教師が答えると「いいねえ」と言って早速クッキーのようなものを木の葉にのせる。「いいねえ！」と二人で顔を見合す。そこにＣ女がきて「あ，これいいじゃん。Ｃちゃんもしよう」と言ってケーキのようなものを木の葉にのせる。「もっと他の色のやかっこいい形のがあるかもよ。探してみる？」と教師が誘うとＢ女もＣ女も「行く！」と言って園庭に木の葉を探しに行く。

作る形にもっと変化をもたせるきっかけを作ろうと考え，「カラスのパン屋さん」の絵本を読んだ。たくさんのパンの種類に子どもたちは大喜びをしていた。そこで，たくさんパンが描いてあるページをラミネートして土粘土のそばに置いておいた。加えて土粘土でねこ型のパンを作りそれも

置いておいた。廃材の空き箱コーナーには持ち運びができるお盆型で浅めの段ボールを追加した。

③パン屋さんする？

登園してきたＦ女がねこ型の土粘土を見つけて言う。「わあ，これかわいい。だれがつくったん？」「これ先生がつくってみたんよ。こんなんもできるかなあって」「Ｆちゃんも作ってみる！」と言って支度を済ませ早速作り始める。Ｂ女も登園してきて「Ｂちゃんも作りたい」と意欲満々である。Ｃ女はラミネートのパンの絵に気づき，「Ｃちゃんは，これ作りたい！」と言い，それぞれがイメージしたものを作り始める。Ｂ女が「入れ物がたりんねえ。先生何か入れ物ない？」と聞くので，空き箱コーナーを指さし「何か探してごらん」と投げかける。Ｂ女は「これいいじゃん」とお盆型の段ボールを選び，出来上がったものをどんどん入れていく。運ぶにはちょうどいい大きさと丈夫さだったようだ。運びながらＢ女が「ねえ，パン屋さんする？」と言う。Ｃ女もＦ女もあとから来たＥ女も「いいねえ」と言って，以前作っていた段ボールの家を持っきてセットする。Ｃ女が「ジュースも売ろうや」と言って，ペットボトルにカラーセロファンを入れた色水を持ってくる。そして「かんばんつくるよ」と言って紙に「じゅうす」と書いて家に貼る。そこに，男の子たちが外から戻ってきて「なにこれー」と店を倒しそうな勢いで言うので教師が「いらっしゃいませーいらっしゃいませー，パンはいかがですか？」と言うと，女の子たちが「いろんなのがあるよ」と言って作ったパンを見せる。

【考察】

土粘土との触れ合いからそれが遊びに発展するまでの子どもとのかかわりを見ることができる。子どもの遊びの様子から次に必要とするものを予想し環境として用意しておく。お膳立てをしすぎると教師主導の保育になるが，子どもの思いに任せっぱなしにしておくと，発展性が乏しく遊びが

図７　パンはいかがですか？

消えてしまうことがある。その兼ね合いを考えながら土粘土を扱った。子どもが意欲的に土粘土とかかわるために秋の自然物を取り入れたりパン屋に気もちが向くようにしたりしたのはよかったと考える。

実践例７「くじ引き屋に変身」　（12 月）

＜背景＞

土粘土のパン屋さんが終わってから作品は乾燥させていた。12 月に入りくじ引き屋さんが始まった。その景品に今まで作った作品を景品にすることになった。そこで作品がよく見えるように透明の袋とキラキラモールを用意した。

「これも景品にするんなら，きれいな袋に入れようや」と言って教師が透明の袋に土粘土の作品を入れモールをするのを見せる。かわいらしいプレゼントになる。周りにいた子どもたちが「やりたい」と言いながら袋詰めを始める。木の葉はもう色が茶色になって破れていたので，代わりに近くにあったカラーセロファンを入れてみる。「これどうかな？」と教師が言うと「かわいいねえ」とＦ女が答える。「入れてみようか」と言うと，「あとはＦちゃんたちでするけえいいよ」と言って友だちと袋詰めを始め，それをクリスマスツリーにぶら下げる。他の作品もぶら下がっている。そしてＦ女たちが「くじ引きやりたいひとー」と言ってくじ引きが始まる。景品となった土粘土の

作品はあっという間にもらわれていく。

【考察】

忘れられそうになっている土粘土の作品を景品にし，しかもかわいらしくラッピングすることで，再度魅力的なものに変わることができた。また，やり方を見せることで自分たちでできるという意欲をもちやってみることもできた。教師が遊びの見通しをもちながら子どもと一緒に考えていくことの大切さを再認識できたと考える。

5　結論

自然を身近に感じ，繰り返しかかわることができる環境構成や教師のかかわりを明らかにするために「カラーセロファン」と「土粘土」を使った。これらの実践を通して，明らかになった環境構成や教師のかかわりを，次の３点にまとめる。

・子どもと自然や自然物との出会いは，感動的で心揺さぶられるような環境構成とかかわりにすること。

実践例①や⑤のように，ペットボトルの影や水を入れたときの太陽が反射してきらきら光る美しさを感動的に演出することや，土粘土に触れるときのどきどきする瞬間を味わえるように演出することで，感動がより一層心に刻まれると考えられる。また，実践例③のように，影に着目することで影の特性に気づき遊びにも取り入れることができた。自然は面白いと感じる感性が養われると考える。

・自分のお気に入りのものを作ることができる素材の準備をすること。

実践例②や⑥のように，自分がこれで作りたいとか，これを作りたいと思えるようなものを準備することが大事である。それにより，ペットボトルとカラーセロファンを通して見る光の美しさが自分だけのものと感じてより一層心を揺さぶることになったり，自分が作りたかったものを作ることができた土粘土への愛着を感じることにつながったりすると考えられる。

・発展性のある遊びになるような環境構成やかかわりをすること。

実践例④のように，初めは影に気づくことから始まりカラーセロファンを取り入れることで影や光に感動し最後は影ふみにまで広がっていった。また，実践例⑦のように，土粘土との出会いからパン屋さんになり最後にはくじ引きの景品としてすてきなプレゼントに変身していった。教師が何通りも考えているものと子どもの姿を絡ませながら様々な発展性があることが，繰り返しかかわることのできる環境の一つといえると考える。

6　おわりに

今回は「カラーセロファン」と「土粘土」に焦点をしぼって環境構成や教師のかかわりを明らかにした。しかし，教師がそれらの素材を通してかかわる自然のすばらしさに気づき，意図的に保育の環境構成に組み入れたり，子どもたちが周りの自然に気づくようなかかわりをしたりしないと，子どもたちもまた周りの自然に気づくことなく成長していってしまう。幼稚園という限られた時間の中で繰り返しかかわることができる環境構成や自然を意識できるようなかかわりを追求することを今後の課題とする。

＜引用文献＞

1)　小田豊：「子どもの遊びの世界を知り，学び考える！」，p. 65，2011，ひかりのくに.
2)　前掲書 1)，p. 21.